

平成 22 年 6 月 9 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2009

課題番号：19730124

研究課題名（和文） 南アジアにおける「国境線」概念の展開と変容

研究課題名（英文） The conceptual evolution and transformation of border in South Asia

研究代表者

伊藤 融（ITO TORU）

防衛大学校・人文社会科学群・准教授

研究者番号：50403465

研究成果の概要(和文): インドとパキスタンは、カシミールの国境線をめぐって独立以来、対立をつづけてきた。しかしながら近年、印パ双方で国境線画定にこだわらず、ヒトやモノの交流を密にしようとする動きが顕著になってきた。この変化の背景として、とくにインドがグローバルな大国へと向かうなかで、その思考様式がしだいに「脱パキスタン」、「脱カシミール化」しつつあることが、作用していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文): India and Pakistan have been opposed to each other since the Partition over the border demarcation in Kashmir. However, recently, the both governments have a pronounced tendency to increase the exchange of human and goods there without sticking to its demarcation. The important factor of this change is India's "de-Pakistanization" as well we "de-Kashmirization" in its mind-set as it is getting to a major global power.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	0	500,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	210,000	2,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：南アジア インド パキスタン カシミール 国境 紛争

1. 研究開始当初の背景

(1) 冷戦後の現実政治に目をやれば、エスニック紛争が、世界各地の平和と安全にとってますます脅威となりつつあることは明白であろう。まずそれは、たとえば解体国家、テロリズムなど、新たな喫緊の課題と結びつくのみならず、エスニック紛争が国境横断的

質をもつ場合には、国家間の暴力という国際政治の古くからの課題を、新たなかたちで生み出してもいる。

他方、南アジアは、いまやGDPでは東南アジアに匹敵するに至り、世界人口の5分の1を抱える地域となった。国際社会が懸念するテロリズムが蔓延し、事実上の核保有国

で登場している。現実政治のうえでは、もはや無視しえず、その重要性は高まる一方である。

(2) にもかかわらず、学問上は、これら新たな課題についても依然として「旧い戦争」(M.Kaldor, *New and Old Wars*, Stanford Univ. Press, 2001) の枠組みでの分析が支配的である。地域的にも南アジア研究は、たとえば欧米研究に比べればいうまでもなく、中国・東南アジア研究と比べても、軽視されてきたことは否定できまい。とりわけわが国にあっては、その傾向は顕著であり、そうした学問上の認識が、政策面の立ち遅れにも如実に反映されてきた。

それゆえ、従来の欧米を中心とした理論では理解・説明しえない現実を学問的に捉えるためにも、実際上の政策課題に応えるためにも、エスニック紛争と南アジア地域を射程に入れられるような理論を構築することの意義は大きい。

2. 研究の目的

(1) 本研究課題ではとくに、カシミール紛争ならびに中印国境紛争を中心的事例として取り扱いながら、国際政治学における「国境線」の意味を問い直すことを目指す。

(2) カシミール紛争は、国家間紛争とエスニック紛争とが密接な連関性を示す好例である。それは第1に、よく知られているように、南アジアの超大国インドと挑戦国パキスタンとの間の、領土とアイデンティティを賭けた戦いである。ここでは、両国間の「国境線」をどう画定するかをめぐって、3度の全面戦争が現実には戦われ、1998年以降は、核戦争の危機が繰り返されてきた。

しかし同紛争は第2に、3度の国家間戦争の結果、暫定的な「国境線」(管理ライン)によって分断されたカシミール・ムスリムの、インド中央政府に抗するエスニック紛争という側面ももっている。インドで活動するカシミール・ムスリムの過激派は、パキスタン支配下のカシミール過激派組織、あるいはパキスタン軍統合情報部から支援を受け、とくに1990年代以降、インド各地でテロ事件が頻発した。今度はその結果として、印パの国家間関係はいっそう悪化し、1999年、2002年には核戦争の危機を招来したのである。

ところが、2002年の危機以降、印パ双方は、急速に関係改善へと向かい、そのモメンタムは現在に至るまで継続中である。なかんずく注目されるのが、国家間対立の焦点となってきたカシミールを舞台とする両国の歩み寄りである。むろん、カシミールの領有権問題

そのもののはなんら解決していないし、その兆しもない。

しかしながら、そうした妥協の余地のない「国境線」の線引き以外の領域では、いずれの国家も、カシミールに現に暮らしている住民の利益に資するような政策を掲げ、それを競い合うようにすらなっている。2005年4月から、カシミール横断のバス運行が開始されたのはその典型といえよう。1947年の分離独立以来、分断されたカシミールの離散家族が、旅券も査証もなしに自由に往来し、さらに経済交流が進展すれば、これまでの国家間紛争とエスニック紛争の泥沼からの、新たな「出口」になるのではないかと期待されている。2005年10月に発生した大地震の救援・復興活動についても、カシミールを横断する動きがみられた。両国、ならびにカシミールの指導者は、これらを「ソフト・ボーダー」論と呼び、国民ならびに住民の圧倒的支持を集めている。

(3) インドは北に隣接する大国、中国との間でも国境画定問題を抱えている。とりわけ、1962年には、それが武力紛争化し、中印関係は以降、冷戦期の同盟構造(米中対ソ印)もあいまって、長きにわたり冷却化した。

ところが21世紀に入り、BRICsに数えられる両大国が急接近をはじめた。首脳外交が定例化し、防衛交流も進められている。貿易関係は急激に深化している(2000年29億ドル、2005年187億ドル)。2003年からは、両国特別代表による国境交渉も始まった。重要なのは、国境問題に関する立場の相違を理由に他の分野の関係発展の妨げとはしないこと、また国境問題の「解決」に至るまでのあいだもこれまでどおり、「平和と安寧」を維持していくことが首脳間で合意されている点である(2005年首脳会談)。

象徴的なのは、シッキムとチベットを結ぶ交易路の再開(2006年)であろう。インドはこれまでチベットを中国領とは認めず、中国側はシッキムをインド領と認めてこなかったが、両国政府とも地元住民の視点から中印国境紛争以来閉鎖された交易路の再開に踏み切った。地元住民の生活物資を中心に貿易が始まっている。国境問題の解決如何にかかわらず、もはや関係改善・強化の流れは不可逆的なものとなっている。

(4) こうした新展開を踏まえ、本研究はまず、これまで、主権国家間に厳格な「国境線」を引くことを当然視してきた国際政治学の理論的背景を探る。南アジアにおいて、なぜ近年に至るまで、欧米の理論枠組みで現象が認識され、政策形成が行なわれ、全面対立に至ったのかが明らかとなろう。

そのうえで、印パ間、中印間において、か

つての「厳格な国境線画定」論から、今日の「ソフト・ボーダー」論への転換という思潮と行動がいかんして生じたのかを明らかにする。ここでは、第1に、エスニック紛争、国家間紛争に対する対応の転換、第2に、南アジア特有の歴史的・思想的伝統が及ぼした影響が浮かび上がってくる可能性がある。それは支配的な国際政治理論に挑戦を投げかけるものとなる。

最後に、この「ソフト・ボーダー」化が、印パ、印中において今後定着するか否かを分析するとともに、さらには、他地域におけるその可能性を探る。印パ、印中両国が、住民の視点から、近代の「国境線」概念を超克する動きを示しているのとは対照的に、日本を取り巻く東アジアではむしろ「国境線」をめぐる対立が先鋭化する傾向にある。この点で、南アジアの事例は示唆的なところがあるのではなからうか。

この際、とくに申請者の居住・研究機関所在地である島根県の抱える「竹島問題」との比較、適用可能性が検討される。日韓両国は、漁業関係者の視点からではなく、依然として近代の厳格な「国境線」概念にこだわり続けている。この差異の背景を明らかにし、「カシミール・モデル」、「中印モデル」が機能するための条件を提示する。それが、国ならびに自治体に対し、オルタナティブな外交戦略を構想するための一助となれば幸いである。

3. 研究の方法

(1) 本研究は主として、文献研究と現地調査から構成される。

(2) 文献研究では、以下につき、南アジアから発信される研究書、学術論文を収集し、要点の整理をおこなう。

- 1) 国際政治理論一般
- 2) カシミール紛争 / 印パ関係
- 3) 中印国境紛争 / 中印関係

・南アジア発の文献は、かならずしも電子ジャーナルや *International political science abstracts*, Paris 等でカバーされていない。それゆえ、アジア経済研究所の「SDIアラートサービス」(無料)を活用して遺漏なきよう努める。適宜、同研究所に複写・郵送を依頼。

・これまでに築いたコネクションを活かし、重要な研究書や論文が執筆された際には、Eメールで知らせてもらえるよう依頼。インド国防研究所(IDSA)の Dr.G.V.C.Naidu 主任研究員らの協力が期待できる。

・1)については、これまでに、とくに以下の拙稿で検討をおこなってきた。

「インド外交のリアリズム」『国際政治』第136号、2004年

「アルタシャーストラのリアリズム」佐々木真・黒田俊郎編『リアリズムの再構成：国際政治理論の新展開』信山社、近刊

しかし、前者はエスニック紛争に、後者は古代思想にとくに焦点を当てたものであり、かならずしも現在の南アジア国際政治理論の潮流を精査したとはいえない。とくに Kanti Bajpai や C.Raja Mohan など、南アジアのエリート層に多大な影響を有する研究者の議論を検討する。

・2)および3)については、研究代表者が定期的に執筆を担当している共同研究(外務省委託研究『インド季報』年4巻、日印協会ならびに『インド経済フォーラム』月刊)とテーマの点では関連性がある。しかし、それらはいずれも新聞記事を中心に時事的話題をとりまとめたものである。本研究では、これら恒常的なニュースのとりまとめ作業を土台にしつつも、あくまでも研究者による深遠なる分析動向を整理する。

(3) パキスタン・イスラマバード及びパキスタン側カシミールにて、外交関係者、軍関係者、メディア、研究者、一般市民(必要に応じ通訳を介する)の各レベルで聞き取り調査を実施。インタビューの要点は以下のとおり。

- 1) カシミール紛争に対するパキスタンの対応(過去/現在)
- 2) 「ソフト・ボーダー」化への評価
- 3) 対印認識(過去/現在)と今後の対印政策

(4) インド・デリー及びシッキム(中印国境)、インド側カシミールにて外交関係者、軍関係者、メディア、研究者、一般市民(必要に応じ通訳を介する)の各レベルで、聞き取り調査。インタビューの要点は以下のとおり。

- 1) 中印国境紛争ならびにカシミール紛争に対するインドの対応(過去/現在)
- 2) 「ソフト・ボーダー」化への評価
- 3) 対中・対パ認識(過去/現在)と今後の対中・対パ政策

4. 研究成果

(1) 文献研究の結果、南アジアでは、依然としてリアリズム的発想が中心的位置を占めていることが明らかになった。国際関係論の最高研究拠点であるジャワハルラル・ネルー大の国際学研究科(School of International Studies)や、防衛研究所等の主要な研究者は、リアリストが支配的である。しかしながら、若い研究者を中心に、リアリズムを越えた議論を展開し始めている者もあり、論壇における変化も少しずつではあるが生じつつある。

とはいえ、そうした新しい知的潮流の存在が、印パ間の「現実の」政策、すなわち、印パ、印中間における「国境線」にこだわらない政策にどれほどの影響を及ぼしたのかに

ついてまでは明らかにすることができなかつた。理論的变化よりも、現実の政策的变化のほうが先行し、それが知的サークルにも影響を及ぼし始めているように思われる。

この文献研究を中心に、カシミール紛争/印パ関係、印中関係の変容に関する研究成果を学会報告、学会論文、共著書のかたちで公表することができた。先行研究や現地研究者の分析を整理し、従来の「国境線」画定に拘泥しない新たな動きが出てきており、それにより和平への展開が維持されていることをクローズアップすることができた。インドと中国、インドとパキスタンにおいて「国境線」のもつ意味合いが変容しつつあることは、文献研究からも明らかとなったといえよう

(2) 2年目(2008年)に入り、インド側カシミール、(ジャンムー・カシミール)、パキスタン側カシミール(アーザード・ジャンムー・カシミール)への現地調査を行ない、現在の紛争ならびに和平プロセスの状況を確認することができた。パキスタン情勢の不安定化と、選挙を控えたインドの事情から、和平プロセスは行き詰まりをみせ始めた。

しかし、それにもかかわらず、「国境線」をソフトな浸透性のあるものに変えていこうとする基調は続いており、民衆から支持されていることが明らかになった。地元政府のみならず、パキスタン中央政府もこの路線をよく支えている。そのことは、現地等で購入した文献においても確認された。すなわち、カシミール問題の根本的解決や、印パの恒久的和平の道筋はみえないものの、「国境線」概念を乗り越えようとする動きが生まれているといえよう。このことは、我が国をとりまく東アジアの状況とはまったく対照をなしている。

もちろん、「国境線」のソフト化の進展状況は、緩やかなものであり、住民の高い期待とはギャップも大きい。パキスタン側ではとくに住民の期待値が高いことがわかった。さらに、基本的にムスリムで構成されるパキスタン側カシミールでも、ムザファラバードとミルプールとでは、文化や生活水準に大きな格差があるばかりか、住民の認識にも隔たりがあることが現地調査をつうじて明らかになった。だからこそ、インド側カシミールでの「同胞」の闘いにシンパシーを寄せる住民や政治家は多いものの、実際に行動に移すとなると一枚岩とはいかないのである。

他方、インド側のジャンムー・カシミールでも、ムスリムの多いカシミール渓谷と、ヒンドゥーの多いジャンムーの温度差が浮き彫りとなった。

総じて、現地調査の結果は、文献研究の結論を裏付けるものであったが、やはり現実の動きのほうが、理論に先行しているように思

われた。

(3) 現地調査の直後、2008年11月には、ムンバイ同時多発テロが発生し、印パ和平プロセスは新たな試練の時を迎えた。

ムンバイ・テロ以降、印パの公式対話が停止し、二国間関係が冷え込むなかで、カシミールをめぐる民間交流(ヒト、モノの移動)も一時困難になった。にもかかわらず、これまでの4年半の和平プロセスの流れ自体が「逆流」することはなかった。カシミールをめぐる印パのトラック2対話は第三国などで細々とつづけられ、2010年に入るとパキスタンのみならず、インド側でも対話再開を求める声が強まった。そのことが、2010年2月の外務次官協議に結びついた。

もちろん、たとえ、今後政府間対話が正式に再開されたとしても、カシミール問題が解決される見通しは立っていない。しかし印パ間では、カシミールの重要性が次第に低下し始めていることは間違いない。とくにインド側は、「グローバル・プレーヤー」をめざすなかで、カシミール問題に拘泥しない合理性を示しはじめている。むしろインドがこだわっているのは、パキスタンにおけるテロ組織の根絶にはかならない。他方、元来カシミール問題の重要性をより主張しつづけてきたパキスタン側ですら、自らが治安と経済上の危機にさらされるなかで、これまでの傾向に少しづつではあるが変化もみられる。

カシミールの領土とアイデンティティをめぐる印パ紛争の意味合いが、今後も低下傾向をたどることに変化はないことが明らかになったといえよう。

(4) このように、印パ間のカシミールをめぐる研究成果は一定程度残すことができたものの、他方で印中間の国境問題については、十分な成果を残すことができなかった。最大の原因は、印中関係の現地調査が安全上の理由等からかなわなかったことにある。とくに2009年には、印中の国境をめぐり、中国側から侵入行為が起きているとの報道を発端に、両国関係が緊張した。印中関係の調査については、中国の専門家等を交えた共同研究のかたちで将来的に挑戦していくこととしたい。

また、日本が抱える竹島問題との比較についても行なうことができなかった。これについては、研究代表者の移籍(2009年3月、島根大学 防衛大学校)による要因が決定的に大きい。

(5) とはいえ、本研究課題のうち、とくにカシミールをめぐる印パの「国境線」に対する認識が実践上も、また理論上も変化しつつあることを明らかにできた意義は大きいと考える。それは国際政治学の近代的な枠組みで

は捉えきれない新たな方向性ではなからうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

伊藤融、インドの核政策の現状と展望
「核兵器国」容認の国際潮流形成過程、
国際問題、査読無、570号、2008、67-76。
伊藤融、核保有の論理とその内外への影響
南アジア核時代の10年、アジア研究、
査読有、53巻3号、2007、43-56。
伊藤融、「カシミール」をめぐるアイデン
ティティと安全保障観の変容、国際安全
保障、査読有、35巻2号、2007、77-95。

[学会発表](計4件)

伊藤融、アジアにおける力の移行 イ
ンドの視点、国際安全保障学会、2009年12
月5日、同志社大学。
伊藤融、大国化するインドの対大国外交、
日本国際政治学会、2009年11月7日、
神戸市国際会議場。
伊藤融、英国におけるカシミール・ムスリ
ムの政治動向、日本南アジア学会、2008
年9月28日、東洋大学。
伊藤融、インドの対中外交・安全保障政策
変化と不変、アジア政経学会西日本大
会、2007年6月2日、福岡大学。

[図書](計2件)

大矢根聡編、伊藤融、他著、東アジアの
国際関係 多国間主義の地平、有信堂、
2009、123-140 担当執筆。

村井友秀他編、伊藤融、他著、中国をめ
ぐる安全保障、ミネルヴァ書房、2007、
109-122 担当執筆。

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 融 (ITO TORU)
防衛大学校・人文社会科学群・准教授
研究者番号：50403465

(2)研究分担者

なし

研究者番号：

(3)連携研究者

なし

研究者番号：